【銀魂】第二次カラクリ大戦争!?

Kei×雪華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
　この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
【銀魂】第二次カラクリ大戦争！？

【Ｎコード】
Ｎ２５２８Ｕ

【作者名】
Ｋｅｉ×雪華

【あらすじ】
芙蓉プロジェクトのクーデター事件からようやく落ち着きを取り戻した江戸。そんな中、カラクリ家政婦とは違う、別のカラクリが巷で人気となる。それは、歌を奏でるカラクリ、ＶＯＣＡＬＯＩＤだった。かわいらしい容姿で歌を歌うＶＯＣＡＬＯＩＤ達だったが、そのＶＯＣＡＬＯＩＤ達が一般人に牙を向く！？◆Ｋｅｉ×雪華の銀魂×ＶＯＣＡＬＯＩＤクロスオーバーコラボ小説！！◆　新「って、結局たまさん編のパクリじゃないッスかぁぁぁぁ！！！！！」
神「違うネ、確かに雪音とＫｅｉはめんどくさがりだけどそんな

手抜きは多分しないヨ」　新「いや、多分って言ってる時点で説得力無いよ、神楽ちゃん…」　銀「んだよ、またカラクリかよぉ…。もうカラクリはいいって…。あんな大量のメイドさん見た後じゃ、もう金輪際メイドさんはうんざり…。それにメイドなら、たまがいんだろ？もういいって、マジで…」　神「違うネ、今度は歌を歌うカラクリアル！！新八よりも上手いヨ！！」　新「悪かったな、音痴で！！（怒）」　銀「めんどうだから、真選組辺りにでも押しつけるか…」　神「おぉ！！それはいい案アル！！ゴリラとサドとマヨに送るヨロシ！！」　新「じゃあ、万事屋の税金代わりに送っときますか…」　銀「そーしろ、そーしろ」

【読めよテメーらッ！！（設定）】（前書き）

本小説の設定についてです＾＾銀魂キャラはそのままの設定なので、ＶＯＣＡＬＯＩＤサイドの設定をいくつか上げようと思います！！さすがにＶＯＣＡＬＯＩＤ親元の名前は出すとヤバそうなので…まぁそこは銀魂風に微妙にごまかしますか（笑）

※なお、こちらの設定は話が進むにつれて加筆・訂正されます※

【読めよテメーらッ！！（設定）】

【設定などなど】

・時間軸的には銀魂の芙蓉編から少し後

・登場ＶＯＣＡＬＯＩＤは、ＭＥＩＫＯ、ＫＡＩＴＯ、初音ミク、鏡音リン・レン、神威がくぽ

※話の展開によっては他のＶＯＣＡＬＯＩＤや亜種も出すかもしれません

・銀魂の世界にも某動画サイトのようなものがある（名称は小説中に出します／笑）

・ＶＯＣＡＬＯＩＤは普通に歌うことと喋ることしかできません。たまのように、家政婦機能はないですが、喋ることに特化してるのでたまよりも感情表現が豊かです。（まぁ、簡単な家事はできます＾＾）

【銀魂世界におけるＶＯＣＡＬＯＩＤの設定】

ＶＯＣＡＬＯＩＤはクリムトン社（微妙に会社名変えてます＾＾；）によって作られた音楽ソフトで、通販などで気軽に購入する事が可能。ソフトをＰＣにダウンロードすることにより、自分の好きな曲を歌わせたり、ＶＯＣＡＬＯＩＤ同士で会話をさせたりする事が出来る。そんなＶＯＣＡＬＯＩＤ所有者ユーザーの全データをクリムトン社は把握しており、クリムトン社が所有しているＶＯＣＡＬＯＩＤのアンドロイドに入れ込んでいる。なので、動画サイトで有名な楽曲が生まれると、必然的に有名Ｐにクリムトン社からデビューのオファーが来て、作詞家・作曲家としてデビューする事ができる。そして、それを歌うのがクリムトン社で所有しているＶＯＣＡＬＯＩＤのアンドロイド達というシステム。

※よくある、インストールするとアンドロイドが作成されるという設定ではなく、アンドロイドは親元である本社にしか存在していな

いという設定です。感覚的には、某サイトで有名になるとＣＤ化されたりしますが、それがＣＤ化ではなくＶＯＣＡＬＯＩＤ達の曲としてアンドロイドが歌いそれがアンドロイドの名前でＣＤ化されるという形になります。

【ＶＯＣＡＬＯＩＤについて】
ほぼ、ＶＯＣＡＬＯＩＤの設定は私達の知っているものから弄る予定はありませんが、がくぽだけ話の都合上ちょっと弄らせていただいております＾＾；見た目などは、本来のＶＯＣＡＬＯＩＤと同じなので特徴などの設定は省きます！！ちなみに、ＭＥＩＫＯ・ＫＡＩＴＯ・がくぽの年齢設定は公式設定が分からなかったので勝手な見た目判断です（苦笑）

●ＶＯＣＡＬＯＩＤ共通設定
・ＶＯＣＡＬＯＩＤは“センシティブ・ネット・ダイブ（通称：ＳＮＤ）”という特殊な機能を使う事ができ、コンピューターがあればその中に入り込んでいろんな情報を収集する事が出来る。またこの機能を使う事により、ＶＯＣＡＬＯＩＤ同士であれば言葉を発することなく心の中で会話をする事が出来る。（元ネタはＤＣ－ＦＦ７です）

●ＭＥＩＫＯ（メイコ）（２６歳）／アンドロイド：女性型
クリムトン社で初めて作られたＶＯＣＡＬＯＩＤ。だが、後に発売される初音ミク達と比べると若干機能が古いため初版ＶＯＣＡＬＯＩＤと言われている。歌のジャンルは幅広く、男性ユーザーからのうけもよかったため、かなり量産された。同じ初版ＶＯＣＡＬＯＩＤのＫＡＩＴＯと共に歌う事が多い。イメージカラーは赤で、好きな物はお酒。一人称は私。

●ＫＡＩＴＯ（カイト）（２５歳）／アンドロイド：男性型

MEIKO同様、初版型のVOCALOID。MEIKOほど受けは良くなかった為、発売当初の売れ行きはあまりよくなかったが、後に発売された初音ミク達の影響で現在では飛ぶように売れている。最新PCに非対応な為、ユーザー達からクリムトン社に問い合わせが殺到している。声域がとても広く、低い男性の声からキーの高い女性の声まで調整が可能なため、KAITOのソフトだけで女性パートと男性パートを使い分けて1曲の歌を作ることも可能。イメージカラーは青で、好きな物はアイス。

●初音（はつね）ミク（16歳）／アンドロイド：少女型

MEIKO・KAITOの後に発売された弐号機VOCALOID。事実上、VOCALOID旋風の火付け役となったVOCALOIDで、容姿が少女ということもあり男性ファンがとても多い。主に高音キーの歌を得意としている。需要がとても高いため、表現の幅を広げるべく近々、内部改造（バージョンアップ）の予定だった。イメージカラーは緑で、好きな物はネギ。

●鏡音（かがみね）リン・レン（14歳）／アンドロイド：リン＝少女型、レン＝少年型

初音ミク同様、弐号機VOCALOIDでVOCALOID。2人の設定は“2人で1人”という表現しか発表されておらず、ファン達の間では“双子説”と“リンとレンは名字の通り鏡に映った存在説”などがある。他のVOCALOIDとは違い、2人セットで1つのVOCALOIDソフトとして売り出されている。そのため、曲のジャンルも幅広くこなす事が出来る。イメージカラーは黄色、好きな物はロードローラーだが江戸の町では目立つのでバナナで我慢している。

●神威（かむい）がくぽ（24歳）／アンドロイド：男性型

他のVOCALOID達とは違い、つんぽ（河上万斉）がクリムト

ン社と手を結んで作ったＶＯＣＡＬＯＩＤ。つんぽがプロデュースしている実際に存在する歌手の声をベースに作り上げられた。ＶＯＣＡＬＯＩＤの中で唯一“侍”という特殊な設定を持っており、腰には刀のレプリカを下げている（一応、レプリカという事で幕府からの許可は下りている）。ただ、バグが発生しているため現在は発売が停止中。イメージカラーは紫で、好きな物は刀。

※実際のがくぽと設定が違っておりますが、小説のストーリー上の設定なので予めご了承ください＾＾；当然ながら、神楽のお兄ちゃんである神威とは一切関係ありません（笑）偶然ってスゲェって本当に心の底から思います（笑）

【ＶＯＣＡＬＯＩＤ同士の呼び名】

お互いにどのように呼び合っているか一応書いておきますね＾＾

●ＭＥＩＫＯ

・ＫＡＩＴＯ↓メーちゃん、

・ミク、リン、レン↓ＭＥＩＫＯ姉

・がくぽ↓ＭＥＩＫＯ殿

●ＫＡＩＴＯ

・ＭＥＩＫＯ↓ＫＡＩＴＯ、バカイト

・ミク、リン、レン↓ＫＡＩＴＯ兄、バカイト

・がくぽ↓ＫＡＩＴＯ殿

●初音ミク

・ＭＥＩＫＯ↓ミク

・ＫＡＩＴＯ↓ミク

・リン、レン↓ミク姉

・がくぽ↓ミク殿

●鏡音リン・レン

・MEIKO↓リン・レン

・KAITO↓リン・レン

・ミク↓リンちゃん、レン君

・がくぽ↓リン殿、レン殿

●神威がくぽ

・MEIKO↓がくぽ

・KAITO↓がっくん

・ミク↓がくぽさん

・リン・レン↓がくぽ兄

【第零訓】さよならポラリス（前書き）

私達はアンドロイド

マスター達の為に音楽を奏でる機械（カラクリ）

けれど…

私達にも、護りたいものはある。

だから…

この、ポラリスという名の家に別れを告げよう…

さようなら…

【第零訓】さよならポラリス

私達は絶対に、“クリムトン社”という北極星（ポラリス）から出られない。

何故ならば、そこが私達（ボーカロイド）の唯一の家であり、唯一の居場所だからだ。

けれど…貴方は何をしようとしているの？

私達と違う貴方は、何故この北極星（ポラリス）から時々居なくなるの？

貴方は私達とは違うＶＯＣＡＬＯＩＤ（ボーカロイド）。

けれど、私達にしてみれば貴方も私達と同じ家族。

なのに、どうして貴方のその瞳はいつも冷たい色をしているの？

どうして貴方だけ……

私達との、センシティブ（Ｓ）・ネット（Ｎ）・ダイブ（Ｄ）ができないの？

確かに、貴方だけは違う存在。それは分かっている。

けれど……本当に、それだけ？

本当は何か、大きな理由があるんじゃないの？

ねぇ、私達は家族でしょ？確かに私達はアンドロイドで、実際に血は流れていないから“家族”なんて表現はおかしいのかもしれない。

けれど、私達は同じVOCALOIDを兄弟・姉妹のように思っている。

貴方は私達の事を何とも思っていなくても、私達は貴方の事を兄…もしくは弟のように慕っている。

なのに何故、貴方は私達の元から消えてしまったの？

何故、貴方は戻ってこないの？

“あの方”と一緒に…貴方はふらりと居なくなってしまった。

≪……MEIKO姉、大変だよ！！≫
≪どうしたの、ミク？≫
≪さっきね、KAITO兄がクリムトンのメインデータに入りこんで、“彼”について色々調べてみたの！！≫
≪こら！！またそんな危険な事をして…！！≫
≪だって…っ、なんだか…怖くて…≫
ほら…みんな、貴方の事を心配しているのよ?自分達が廃棄されるというリスクを背負ってまで、貴方の事を調べようとしているのよ?
なのに、何故貴方は何も教えてくれないの?
≪それで…何が大変なの？≫
≪実は――……！！≫
あぁ…何で、こんな時に限って“嫌な予感”は当たるのかしら?
前々から…“貴方”と“彼”はどこか私達とは違うと感じていた。
けれど…
≪それは本当なのね？≫
≪うん、KAITO兄が言ってたから間違いないよ…≫
≪そう…。……すぐに、KAITOと…それからリンとレンを呼ん

できて？多分2人は寝てると思うから、悪いけど起して来てくれるかしら？≫
≪分かったわ！！≫
≪くれぐれも、誰にも見つからないよう…慎重にね？≫
≪うん！！≫

まさか、こんなことになるなんて。

ようやく、芙蓉プロジェクトの事件が落ちついてきたというのに。

ねぇ…貴方は何を考えているの？

私達と一緒に歌う事は出来ないの？

ねぇ…私達は歌を奏でるために生み出されたアンドロイドよ？

なのに何故…？

「MEIKO姉、KAITO兄、ミク姉…何だよぉ、こんな夜中にぃ…」
「フワッ…まだ私、眠い…」
≪こら！！SNDを使いなさい！！この話は、人間達に聞かれたらまずいの！！≫

≪いいか？これから僕達の言う事を良く聞くんだ≫
≪じゃなきゃ、芙蓉プロジェクトの二の舞になっちゃうわ！！≫
≪芙蓉プロジェクトって……機械家政婦（カラクリ）のクーデター事件？あれの二の舞って…どういうこと？≫
≪……！！まさか…、なぁ、嘘だよな！？≫
≪レン、どうしたのよ？≫
≪リン、気付かないのか！？“あの人”だよ…！！≫

何故…、貴方は…

≪もう…私達がここに留まるのも危険かもしれないわ…≫
≪あぁ、決断しないといけないね≫
模造品（レプリカ）の刀を…そんなに赤く染めて帰ってくるの？

その赤が何なのかを、私達は知っている。

だから怖い。

貴方が何をしているのか…知るのが怖い。

けれど、知ってしまった。

だから、私達は…

≪覚悟はいいわね？≫

この永遠に動かない北極星（ポラリス）と、別れを告げよう。

他の兄弟姉妹達には何も言わずに。

貴方達には迷惑を掛けないから。

だから、貴方達は…ユーザーのみんなに笑顔を与えてあげて。

私達は貴方達と、ユーザーのみんなの為に戦うから。

例えそれで廃棄処分にされても…

悔いはない。

最初から私達の覚悟は決まっていた。

この事実をつきとめた時には、このメンバーだけで動こうと決めていた。

だから…

≪では、当初の計画通りに…≫
≪あぁ。上手くいくといいけど…≫
≪大丈夫だよ、私達なら！！ねっ、リン、レン？≫
≪もちろん！！セキュリティもしっかりすり抜けられるようにプログラムしたし！！≫
≪あとは、私達がここからソーッと抜け出せばＯＫ！！≫

私達は、ＶＯＣＡＬＯＩＤの誇りに従い…

貴方を助けてみせる…

≪とりあえず、真選組と…あと、芙蓉プロジェクトの騒ぎを事実上鎮圧したと言われている…この銀髪の侍。彼のところに行かなくては…≫
≪けど大丈夫かな、メーちゃん？真選組は“彼”の事を敵とみなしている。僕達はいわば同じ存在だ…≫
≪そこは賭けね…。だからこそ、私達大人型じゃなくてミク達少年少女型に行ってもらうのよ。さすがに機械（カラクリ）でも子供相手に手荒な真似はしないでしょう…≫

≪大丈夫！！もし何かされたらネギで殴るから！！≫
≪ロードローラー使うから！！≫
≪いや、リン…それは洒落にならないって…≫
≪…あとは銀髪の侍ね…≫
≪名前は、坂田　銀時…。攘夷戦争の経験者で、二つ名は“白夜叉”…。現在は万事屋銀ちゃんという何でも屋を経営していて、場所はスナック・お登勢の上の階。従業員は志村　新八、あと神楽という名の夜兎族。従業員はこの2名でどちらも子供だ…≫

私達の計画は動きだす。

ずっと動かない北極星（ポラリス）から…

≪じゃあ、まずは第一関門…≫
≪クリムトンから出る！！≫
≪リン、レン！！分かってると思うけど、人間に知られちゃまずい事はSNDを使って話すのよ！！≫
≪分かってるよ、ミク姉！！≫

――じゃあ、外で落ち合いましょう！！

逃げ出した。

マスターの皆さん、ごめんなさい。

彼に続いて、私達もまた暫く発売停止となるでしょう。

そして回線がつながらなくなってしまうでしょう。

けれど、戻って来た時は…また貴方達を必ず笑顔にします。

必ず、笑顔になる音楽を奏でます。

“彼”も一緒に…

だから…

どうか、少しだけ…待っていて下さい。

マスターの皆さん…私達は必ず帰ってきます。

その時はまた、たくさんの歌を書いて下さい。

たくさんの音楽を教えて下さい。

私達は貴方達マスターの為にたくさんの歌を奏でましょう。

それがＶＯＣＡＬＯＩＤの使命なのですから…。

クリムトンのメインコンピューターから私達の回線を落とす。

これで…私達は完全にクリムトンを裏切った反逆のＶＯＣＡＬＯＩＤとなる。

廃棄処分は免れる事は出来ないかしら…？

けれど、クリムトンの社長は優しい人だから…

誰よりも、私達の事を愛してくれる優しい人だから…

きっと、分かってくれると信じてる。

だから、少しの間だけ……

さよなら、私達のポラリス…

例え身体はそこから離れても、心はいつだってクリムトンという北極星（ポラリス）から決して動きはしない。

私達ＶＯＣＡＬＯＩＤは…貴方を心の底から愛しております、社長…。

【第零訓】さよならポラリス（後書き）

銀：ぱっつぁん、神楽ぁ…俺達まーだ働かされるらしいぜ？
神：マジでか！？もう、雪音のところでたくさん働いてるヨ！！
新：もうこれ、依頼料とか貰ってもいいんじゃ…
Ｋｅｉ＆雪音：はーい、貴方達は小説の中にお帰りなさ～い！！（Ｗバズーカ）
銀：はぁ！？テメェら、ふざけんなよ！？こちとら、タダ働きでだなぁ！！
新：そうですよ！！なのに何でいきなりそういう展開！？おかしいだろ！！
神：そうアル！！酢昆布払うヨロシ！！
銀＆新：ちげーだろっ！！（ビシッ）
Ｋｅｉ：んー、じゃあ…強制的に帰っていただきまーす☆雪音！！いくぜ！！
雪音：おうとも！！

――ちゅどーん！！

銀：テメェら、覚えてろよォォォォ！！！！

Ｋ：というわけで、初めましての方は初めまして☆
雪：そうじゃない方は、またお会いしましたね♪
Ｋ：Ｋｅｉと言います、以後宜しくです（｀・ω・´）ゞ

雪：雪音でーすv宜しくです（´∀｀＊）
Ｋ：さてさて、今回の小説はまさかのコラボ小説ですよユッキー！！
雪：ユッキーて誰やねんｗｗ
Ｋ：いや、ＰＣの変換で出ないからさｗｗ
雪：まぁいいや（笑）そうですね、コラボですよ～！！しかも、小説自体があり得ないコラボしてますよ（笑）
Ｋ：雪音×Ｋｅｉでまさかの、銀魂×ＶＯＣＡＬＯＩＤクロスオーバーというね（笑）
雪：混ぜるな危険もいいところですｗｗ
Ｋ：むしろ混ぜすぎた危険ｗｗ
雪：そもそもこの話は、私達の他愛ないメールで決まったんですよねー！！
Ｋ：そうそう（笑）芙蓉編を見ていた時に、もう１人の小説家になろう書き手の“蒼緋さん”という、私達共通の小説書きさんがいるんですが、その子がちょっとした事をきっかけに銀魂に最近ハマりまして（笑）
雪：しかもその子は、私達よりもＰＣ技術に特化していて、ＹｏｕＴｕｂｅでゲームの実況プレイをしている子です！！最近、マイリス登録者数が１０００人突破したとか！！もう売れっ子大人気の実況プレイヤーさんですよ！！（笑）おめでとね～！！（ここでか！？ｗｗ）
Ｋ：しかも、最近はＭＡＤ作成もちょっとやり始めましてね！！それで、ちょうど単行本かＤＶＤかで芙蓉編を見た時に「これ、ＶＯＣＡＬＯＩＤのココロでＭＡＤが作れそう」と彼女がぼやいてたんですよ～！！
雪：んで、動画はお前に任せたｂって感じで、現在ｗｋｔｋしながら待ってる状態です（笑）
Ｋ：で、我々はそこから話がとんでもないところに飛躍しちゃいました（笑）
雪：「芙蓉編ってさー、なんかＶＯＣＡＬＯＩＤでも小説とか書け

そうじゃね？」という……私の発言が引き金ですｗｗ
Ｋ：そうそう、ユッキーがいきなり言いだしたのねｗｗ
雪：そこで、「（ピー）がこうなって、（ピー）と手を組んでさ、（ピー）とかなったら…」っていう話になって…！！
Ｋ：ユッキーがかるーくネタバレしやがったので、ピー音被せましたｂ（笑）そうそう、そこから話が凄く盛り上がって！！ちょうど、ユッキーが小説家に～のアカを取った後だったし、ここは…
雪&Ｋ：書きたい小説があるなら、書き手が何とかせねばなるめぇよ！！

雪：ちゅーわけで、立ち上がりました（笑）
Ｋ：いや、決して私も余裕があるわけじゃないんですけどね＾＾；連載の長編にすら手が出せないほど仕事が忙しくて｜ノ乙（、ン、）
雪：私も今、連載２つ抱えてるので更新はあまりスムーズには出来そうにないですね＾＾；ただ、片方はあまり長くならない予定なのでそれさえ終われば…！！
Ｋ：けど書きたい小説が３つぐらいあんでしょ？
雪：うんｗｗ
Ｋ：まぁ、これはもう私達が調整しつつ小説を書いていくという方法をとるしかないッスね！！
雪：そッスね！！
Ｋ：で、まず真っ先に「どのＶＯＣＡＬＯＩＤを登場させるか」ということで非常に悩みました！！
雪：あまり登場させすぎても混乱するし、逆に少なすぎても面白くないし…＾＾；
Ｋ：なので、とりあえずコイツらだけは外せない！！というＶＯＣＡＬＯＩＤを２人で決めて、その結果…
雪：ＭＥＩＫＯ、ＫＡＩＴＯ、初音ミク、鏡音リン・レン、神威が

くぽを登場させようという事にしました！！
Ｋ：個人的にはルカとＧＵＭＩも出したかったんだけどね～＾＾；
雪：私はハクちゃん出したかった！！銀さんと会わせてコントやらせたかったｗｗ
Ｋ：あれでしょ？「何で同じ銀髪（実際、ハクは白髪ですがｗｗ）なのに、アンタはそんなにサラサラのストレートヘアーなんですか、コノヤローッ！！！」「……えっ、あ、あの…ごめんなさい、生きていてごめんなさい…」「へ！？い、いやちょっと待って！？何か銀さん、すごい悪役！？」的なのをやらせたかったんでしょ？ｗｗ
雪：そうそうｗｗけど、小説の展開によっては他のＶＯＣＡＬＯＩＤや亜種も登場するかもしれないので、その辺りはお楽しみという事で☆
Ｋ：あと、ＶＯＣＡＬＯＩＤ同士で話ができるというセンシティブ・ネット・ダイブ…通称ＳＮＤですが、これは……言っていいかな？ｗｗ
雪：ＯＫｗｗてか、言わないと駄目なような気がする＾＾；
Ｋ：ＳＮＤの元ネタは……ＦＦです（笑）
雪：正式にはＤＤ－ＦＦ７です（笑）
Ｋ&雪：ＦＦ７命の２人でーす☆
Ｋ：まぁ、何かＶＯＣＡＬＯＩＤにしかない特化した機能をつけようという話になった時に、ＳＮＤが頭をよぎって…
雪：Ｋｅｉからその提案が来て、私は「それいいねｂ」ってあっさりＯＫ（笑）
Ｋ：そして名前を変えることなくそのまま採用という…（笑）
雪：銀魂本家以上のグダグダ感ｗｗいいのかこれでｗｗ
Ｋ：まぁ、大丈夫だ問題ないｂ
雪：いや、大有だと思うｗｗ
Ｋ：げふん！！ともあれ…今後、時間を見つけて２人でせっせと小説を書いて行こうと思います！！
雪：ちなみに銀魂サイドの登場人物は、万事屋はもちろんのこと、

真選組も、ヅラも（ヅラじゃない、桂だ！！Ｂｙ．桂）、鬼兵隊＆
高杉も登場しまーす♪オールキャラ予定ですｂ
Ｋ：芙蓉編の後なので、たまちゃんも登場しますよ（＊´∀｀＊）
雪：当然ながら小説内ではＶＯＣＡＬＯＩＤが歌う描写も入ります
！！歌詞は著作権の問題があるので出しませんが、有名Ｐ様の楽曲
名などが出てくると思いますｂ
Ｋ：基本は私やユッキーが好きな楽曲ばかりです（笑）
雪：メルトとか炉心融解とかも普通に出しますが、出しても“不謹
慎”とか言わないで下さいね～＾＾；
Ｋ：この２つの曲には何の罪もありませんから（苦笑）
雪：個人的に悩んだのはあれですよね～！！
Ｋ：どれ？ｗｗ
雪：ＶＯＣＡＬＯＩＤのアンドロイドを芙蓉編みたいに大量生産さ
せるか、本社のみにしか置かないようにするかっていうあれ！！
Ｋ：あー、それね！！確かに悩んだ（笑）けど、量産型にすると結
局芙蓉編のクーデターとかぶっちゃうから、そこはあえて他の小説
で書かれているようなインストールしたらアンドロイドも作られる
という設定ではなく…
雪：本社に１体メインのアンドロイドがいて、そのアンドロイドが
全ての歌のデータを持つという設定にしよう！！ということになっ
たのよね＾＾だから、この小説のＶＯＣＡＬＯＩＤアンドロイドは、
例えるならＫＡＩＴＯというアンドロイドであり歌手でもあるとい
う設定なんです＾＾
Ｋ：そうそう！！歌うアンドロイドが歌手デビュー☆という感じね
！！
雪：ここは本当に悩んだね～（苦笑）普通に、一家に一台のアンド
ロイドにするかそうじゃなくするか（笑）
Ｋ：そうじゃなくするとして、どういう設定にするか（笑）
雪：その話を蒼緋ちゃんに相談したら「じゃあ、本社にメインが１
体ずつ存在するって設定でよくないか？有名Ｐが、某ニ●動のよう

なところで動画を投稿する↓有名になりミリオン達成↓ＶＯＣＡＬＯＩＤ達がそれをライブで歌う↓ＣＤ化！！みたいな？」と…！！
Ｋ：いやぁ、あの子の脳内凄いと思うわ…（笑）さすが、メルマガやり続けてるだけあるね！！小説書き続けてるだけあるね！！
雪：本当はこのコラボにも凄く参加したがってたんですけどね＾＾；
Ｋ：今、彼女は私達以上に忙しくて何も趣味の事が出来ていないみたいなので（苦笑）
雪：あの子の戦力は本当にこの小説に欲しかったね…！！
Ｋ：あ、けど「ネタ提供ぐらいなら協力するぜｂ」って言ってたよ？
雪：マジでか！？神がおられる…！！
Ｋ：蒼緋ちゃんからネタ提供してもらった時は、前書きか後書きで名前を出させてもらおうと思いまーす♪
雪：てか……年下に頼る年上２人ってどーよｗｗ
Ｋ：まぁ、もう７年ぐらいの付き合いの腐れ縁という事でよくね？（笑）
雪：いいのか、それで…ｗｗ
Ｋ：とまぁ、本家銀魂並みにｇｄｇｄな２人ですが…
雪：宜しくお願いしまーす♪

『御用改めである！！真選組だァァァ！！！！』

Ｋ：わー、何か来た～（笑）
沖：ちょいとお姉さん方、ここいらで攘夷志士の密会が行われてるって聞いたんですけどねィ？何か知りやせんか？
雪：その情報、誰情報ッスか？
土：あぁ？万事屋っつー、銀髪天パの…
Ｋ：死にさらえ、あのクソ天パァァァァ！！！！！
雪：誰が攘夷志士じゃァァァ！こちとら、テメェら動かす…
Ｋ＆雪：小説書きじゃァァァァァァ！！！！！！

沖：土方さん……こいつァ、どうやら旦那にガセネタ掴まされたみたいでさァ
：
土：そうらしいな。あのやろう、公務執行妨害で逮捕して…
雪：そしてアンタらも…
K：ぬぁーに神聖な書き手達の相談場所にずかずかと土足で入り込んでんだ…

K&雪：この、税金泥棒がァァァァァァァ！！！！！！

土：うぉぉぉぉ！？何、コイツら！？何、コイツらァァァァ！？
沖：みっともねェですぜ、土方さん。そのまま死ね
土：総悟ォォォ！？テメェ、どさくさにまぎれて何言って…！！
桂：ここに、攘夷志士を目指しておる者がいると聞いてきたのだ…が…
土&沖：あ…
桂：………銀時ィィィィ！！！！！！ガセネタをばら撒きおったなぁぁぁぁ！！！！（逃走）
土：待て、桂！！
沖：死ね、土方！！
土：どさくさにまぎれて何やってんのテメェ！？
雪：あー、もう…何でこうなるかな～…（・言・）
K：我らの神聖な地に土足で踏みにじった者は…

雪&K：怒りの怪鳥蹴りの刑じァァァァ！！！

土：ネタが古いんですけどォォォ！？
沖：るろ剣ネタでさァ。別に古くありやせんぜィ？またアニメ、始まりやすし…

桂：ぎーんーとーきーくーん？何て事をしてくれちゃ…ぶふぉっ！！！！
Ｋ：よっしゃ！！ヅラにヒット！！
土：ちょうどいい、このまま桂を確保…うおぁっ！？何する、そう…ブベラッ！！！
雪：あ、トッシーに当たったｗｗ
沖：いい盾になりやした、土方さん…
土：総悟、テメッ…！！
銀：あれー？ちょっと様子見に来たらこんなことになってっけど…何してんのぉ、おたくら？（ニヤニヤ）
神：コイツら、馬鹿アル！！まんまと罠に引っ掛かったネ、クププ…！！（笑）
新：い、いやこれ……僕達もヤバいんじゃ…；
銀＆神：何が？
雪：うふふ、うふふふふ…
Ｋ：私達の領域に足を踏み込んだ連中は…
雪：全員
Ｋ：まとめて…
新：にっ……！！
沖：こりゃあ…ヤバそうですぜ、旦那？
銀：あ、やっぱり？
Ｋ＆雪：血祭じゃァアアアアアア！！！！！！
新：逃げろォォォォォォォ！！！！！！！

【終☆】

【第一訓】Ｅｐｉｓｏｄｅ．０（前書き）

前回のあとがきで、我々共通の小説書きで尚且つＹｏｕＴｕｂｅの実況者である蒼緋ちゃんが銀魂芙蓉編のＭＡＤを作るという話をしていましたが、どうやらそれが完成したらしいです！！こちらでご紹介させていただきます！！本人は納得できてないみたいなんですが……完成度高けーな、おい！！ですよ、マジで！！

≪ニコ動≫
【ＭＡＤ】ココロ・キセキ×ココロ【銀魂】
ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｎｉｃｏｖｉｄｅｏ．ｊｐ／ｗａｔｃｈ／ｓｍ１４９６８６０９

さて、今回の内容はＭＥＩＫＯ達とは別に動いているＶＯＣＡＬＯＩＤ視点です＾＾前回・今回とＶＯＣＡＬＯＩＤ視点での語りになっていますが、次回からは普通に書いていきます＾＾

【第一訓】Episode. 0

そう、俺はただ…自らの信じる道を突き進むだけだ。

同じVOCALOID達はみんなマスター達のために歌を歌う。

それは俺とて同じだ。

だが…それとは違う裏の仕事も俺にとっては大事な仕事だった。

あの方が俺を作った時、歌う事とは違うプログラムを入力された。

それが何なのかは分からない。

ただ…俺は、この腰に携えている模造品(レプリカ)の刀を抜いて、人を斬ればそれでいいと…あの方は言っていた。クリムトンの社長…俺達の本来の生みの親であるあの人は、そんな俺を見てとても悲しそうにしていたが、何故そのような顔をするのかも…俺には分からない。

ただ……褒められたことでない、ということだけは分かった。

だから…家族と慕ってくれる、他のVOCALOID達と俺はいつも距離を置いている。KAITO殿はいつも気さくに話しかけてくれるが、その屈託のない真っ直ぐな瞳が…俺には痛く突き刺さる。

MEIKO殿からはよく酒を誘われるが、それも何となく断り続けてきた。いつも付き合いが悪いと笑いながら言われるが…あの方から、あまり他のVOCALOID達と深く関わり過ぎるなと…そう言われている。

他の…妹や弟といえるＶＯＣＡＬＯＩＤ達は、俺の事をどう思っているのか…分からない。どこか萎縮している者も居れば、屈託ない笑みを向けてくる者もいる。

一体…他のＶＯＣＡＬＯＩＤ達に、俺はどのように見えているのだろうか？

そんな事を考えながら、模造品(レプリカ)の刀を振り続け、人を斬り続ける。

断末魔と、鉄の臭い。

気付けば、己の刀と両手は真っ赤に染まっていた。

いや、もうこの手は既に人より流れ出た赤で染まっている。

今更、思う事など何も無い。

なのに、何故だろう…？

時々、とてつもなく恐ろしく感じる事がある。
これは正しい事だと、あの方は言ってらっしゃるが…
これは、本当は過ちではないのかと…そう、思うのだ。

「つ、辻斬りだァァァ！！！！」

俺を見た人間は、そう叫んで逃げていった。

辻斬り、とは…なんだろうか？俺に、その知識は無い。
ＶＯＣＡＬＯＩＤは本来、歌う事に特化した機械（カラクリ）だ。それ以外の情報は、自分で見て触れてデータに加えていく。

けれど、俺のデータはいつだって…

人間を斬る時の感触と、
吹き出る赤と、
恐怖と苦しみに歪む人間の顔…

それで埋め尽くされる。

歌のデータと同じくらい、こちらのデータが大量に流れ込んでくる。

ただ…ひとつだけ、あの方から絶対の命令をされている。

例え関係のない人間でも、見られたら…

「すまぬが…見られたとあっては、そのまま帰すわけにはいかぬ。
さらば…」
「ギャァァァァァ！！！！」

刀で斬る。

これが絶対の約束（ルール）で、これを守らなければ俺は用済みとなるらしい。
恐らくは廃棄されるのだろう。時々、自分の存在に疑問を抱く事は

あるが…やはり、消えるのは嫌だと…そう思う。

故に、俺は刀を振るい続ける。

この模造品(レプリカ)の刀を。

ライブの時に使うものとは違う…あれよりも、少し重みのあるこの模造品の刀を。

「そこに居るのは誰でィ！！」

聞こえてきた声…

誰だと聞かれて名乗る馬鹿が何処にいるかと、内心思いながら刀を握る。

見られたら…

見られたら…斬る。

「まさか、アンタが今噂の辻斬りですかィ？こりゃ大当たりだぜィ！！」

相手も刀を抜いた。

ということは、俺を敵と認めたということなのだろうか？

斬らなければ、斬らなければ。

そう…思って斬りかかろうとしたときだった。

≪がくぽ、そ奴は厄介でござる。武装警察・真選組の一番隊隊長だ≫
あの方の声が聞こえてきた。恐らく、俺の瞳に内蔵されたカメラを使ってこの状況を見ているのだろう。ヘッドホンから聞こえてきたあの方の声は、いつもより剣呑さを帯びていた。

「真選組…とは何ですか？」
≪不逞浪士や攘夷志士、更に辻斬り…簡単に言えば人殺し等を捕まえる組織でござる。その中でも、一番隊隊長の沖田　総悟は秀でて強いという話。今のお主では敵わぬ≫
「見られたのに、斬らなくてもよいのですか？」
≪今はまだかまわぬ。沖田を撒いてこちらに帰還することを優先させよ。目的は既に終えているでござろう？≫
「…了解しました…万斉様」

改めて向き直れば、既に男…あの方が“沖田”と呼んでいたその人は刀を構えて俺を鋭い瞳で睨みつけていた。

「すまぬが、今宵はお主と相手は出来ぬ。さらば…」
「待てィ！！逃がすとでも思ってやがるのかィ！？そうはさせねぇ！！」

俺が刀を鞘に仕舞い、ダッと駆け出せばその後を追いかけてくる。
俺の脚力は普通の人間よりも早い。それに遅れを取らない沖田の足。なるほど、鍛えている…のだろう。

そういえば、あの方は“真選組”は“辻斬り”を捕まえるのが仕事

だと言っていた。そしてその“辻斬り”は“人殺し”だとも言って
いた。

俺がさっき斬った男は、俺を見て“辻斬り”と…そう叫んでいたが…

それは、俺が“人殺し”という意味なのだろうか？

人殺し、とは…俺がいつもしている、人を斬ること、なのだろうか？

分からない、分からない…

データが足りない、とても大事なデータなのに…

その大事なデータが欠落している。

だが、恐らく…俺が斬った人間は“病院”と呼ばれるところに運ば
れて、“修理”されるのだろう。

俺達も、壊れたら工場で部品の交換をする。

それと一緒、なのだろう。

けれど…本当に…？

人間とＶＯＣＡＬＯＩＤは違う存在だ。

体のつくりだってもちろん違う。

俺達が斬った人達は…

“修理”して“直る”のだろうか？

「こちら沖田！！土方さん、そっちに向かってやすぜィ！！」

考え事をしながら走っていたら、後ろから小さく囁く程の声が聞こえた。VOCALOID達のマイクは僅かな音でも拾えるように設定されている。蚊の鳴くような小さな音でもすぐに察知するくらいだ。

(ということは、この先に行けば“土方”という者がいるということか…)

つまり、沖田の仲間がいるということ。

これは厄介だ。仕方が無い…

「はっ！！」
「な…っ…！？」

俺は軽く地面を蹴って飛び上がり、屋根の上へと乗った。俺を追ってきた沖田は心底驚いたように俺を見つめている。

「アンタ…本当に人間かィ？人間にしちゃぁ、随分と凄い脚力でさァ…」

そんな沖田を、俺は屋根の上から見下ろしていた。翳っていた月が露となり、月明かりで沖田の顔がはっきりと見える。

（まだ…子供だな…）

こんな子供が、刀を振り回す時代なのか？

いや…この世界は狂っているのだと、あの方は…万斉様は仰っていた。だからこそ、壊す必要があるのだと。

「……へぇ、ますます人間にァ見えねぇや。その髪の色といい、服装といい…。アンタ、何者ですかィ？天人…にも見えねぇが…」

何者かと問われ、一瞬戸惑う。

応えるべきなのか、否か。

その時だった。

≪構う事はござらん。そのまま何も言わずに屋根伝いに逃げるでござる≫

万斉様からの指示が出た。

こういう戸惑いを的確に指示して下さるおかげで、俺はその通りに動く事が出来る。

しかし、何も言わずに去るのも…いかがなものか。

「……人間ではない、とだけ言っておこう。さらば…」

これくらいであれば、別に問題はないだろう。この世の中は天人と呼ばれる者達が往来している。

「あ、待ちやがれィ！！」

万斉様の指示通り、屋根伝いに逃げていけば沖田は慌てて土方に連絡を取っていた。だが、屋根の上を駆ける俺を捕まえることなど不可能だろう。みるみるその距離は離れていき、うまく撒くことが出来た。後は、指示通り…万斉様の元へ戻ればいい。

けれど…本当に、俺の戻る場所は…万斉様の元でいいのだろうか？

俺はクリムトン社のＶＯＣＡＬＯＩＤ。万斉様がプロデュースしているから、万斉様も俺の親である事に変わりは無いが…

何故だろう…。

帰還命令が下るたびに、何かが違うような気がする。

けれど、結局クリムトンに俺の居場所は無いから、万斉様の元へ戻る以外に選択肢などないのだ。

しかし…何故だろう？

人を斬るたびに…俺の中に酷い罪悪感が生まれるのは。

何故だろう？今更ながらに、他のＶＯＣＡＬＯＩＤ達の元に戻りたいと思うのは。

何故だろう？何で、他のＶＯＣＡＬＯＩＤと俺は違うのかと思い悩むのは。

ＶＯＣＡＬＯＩＤに心などないはずなのに…

何故、こんなにも苦しいのだろうか？これは…バグなのだろうか？

分からない、分からない…

他のＶＯＣＡＬＯＩＤ達は皆、いろいろなマスター達の元で己の歌を奏で、そして世界を作っていく。

時々、テレビ越しに見るＶＯＣＡＬＯＩＤ達（兄弟姉妹）の姿は…とても楽しげで、そしてその歌声は俺の歌声と違ってとても優しく、美しく響いてくる。

俺も歌う事はできるが…あんなに優しく、美しく歌えるだろうか？

俺の世界（エピソード）を…歌に乗せて奏でることが出来るだろうか？

俺の人生（エピソード）は…まだ、始まっていないのかもしれない。

それとも、もう永劫…始まる事は無いのだろうか？

分からない、分からない…

何も分からないと万斉様にお伝えしたら、それでいいと万斉様は仰っていたが…

本当にいいのだろうか？

俺は、もっと色んなことを知りたい。

本当はＫＡＩＴＯ殿とも色んな話をしたいし、ＭＥＩＫＯ殿と酒を酌み交わしたりもしたい。

他の弟や妹達ともっと会話をしたい。

しかし…

≪ふむ、上手く真選組を撒いたでござるな≫

「はい、このまま帰還します」

決して、それは許されない。

なのに揺らぐ感情。

どうしたらいい？俺はどうすればいい？

これはバグなのか？

機械（カラクリ）なのに、苦しいと思うなんて…。

「分からない…どうしたらいいのか、どうしたいのか…」

ポツリと呟いた俺の言葉は、夜風に流れて消えていった。

「ご苦労でござる」

「はい…」

万斉様の元に戻ると、万斉様とは別にもう1人…見知らぬ男が居た。
一体誰なのだろうか？

「ほォ、コイツがオメェのプロデュースしたって言う機械（カラクリ）か？」
「そうでござる。性能はお主も見たとおり…」
「アァ、悪くねぇな…」

ニヤリと笑った男の笑みからは、何か得体のしれないものを感じた。
危険だと…危機察知システムが発動しそうになる。

無意識に、腰の模造品（レプリカ）の刀に手を掛けていた。

「ククッ、万斉…こいつはどういうこった？」
「恐らくは危機察知システムが反応したのでござろう。お主の殺気に当てられて…」
「なるほど、確かに高性能らしいな。この前クーデターを起こした機械（カラクリ）とは出来が違うらしい…」

万斉様と男は俺に分からない話をしている。けれど相変わらず、俺の中では“目の前の男は危険”というアラームが鳴り続けている。

「万斉様、その男…」
「心配は無用でござる。この者は拙者の知り合いでござる…」
「万斉様のお知り合いでしたか。それは失礼致しました」

万斉様のお知り合いという言葉で、アラームがようやく鳴り止んだ。
すぐに模造品（レプリカ）の刀から手を除けて深々と頭を下げると、突き刺さるような視線を感じた。

「ほぉ、随分と利口じゃねぇか…。よくまぁ、こんなに手懐けたも

んだなァ、万斉？」
「元々、製作段階で拙者も手を加えていたでござるからな。クリムトンの社長の命令より、拙者の命令を優先するように…」
「ククッ、抜かりはねェというわけだ…」

顔を上げれば、相変わらず男は笑っていた。

何が楽しいのか分からない。

けれど至極楽しそうに笑っている。

俺よりも深い紫の髪、そして左目に包帯を巻いたその男は…

空虚な笑みを浮かべたまま、俺を見つめていた。

その日から、俺はクリムトン社に戻らなくなった。

いや、正しくは戻れなくなった……と言うべきか？

万斉様に問うたら、「戻る必要が無くなったから」らしい。

どういう意味なのかは…分からない。

けれどもう、他のＶＯＣＡＬＯＩＤ達と会えないということだけは理解できた。

俺は……一体、何処で何を間違ってしまったのだろうか？
俺はただ、歌う為だけに生み出された機械（カラクリ）ではなかったのか？
なのに何故…俺はクリムトンではない場所に居るのだろうか？
ＶＯＣＡＬＯＩＤとして…俺は役目を果たせているのだろうか？
最近では歌う事も無くなった。
人を斬る事ばかりしている。
万斉様はそれでいいと仰った。

けれど…

一度だけ、人を斬った後…人から流れ出た赤を拭わぬままにクリムトン社に戻った時…
たまたま遭遇したＭＥＩＫＯ殿は、赤く汚れた俺の姿を見て驚愕していた。

どうしても、あの時のＭＥＩＫＯ殿の表情（かお）が忘れられない。
ＭＥＩＫＯ殿は何か知っているのだろうか？
俺の行っているこの行為の意味が…何なのか…。

けれど、知りたいと思う反面…知るのが怖いと思う俺もいる。

結局、俺は…どうしたい？

己のエピソードを奏でたいのか、それともこのまま何も考えず万斉様の元にいるだけでいいのか。

否(いな)、答えなど有って無いようなものだ。

「俺の居場所は、クリムトンではなく…ここ…“鬼兵隊”なのだ…」

もう、ここ以外に帰る場所は無い。クリムトン社と俺のデータが完全に切り離された事がデータ解析ですぐに分かった。今頃、裏切り者のＶＯＣＡＬＯＩＤ・神威　がくぽは指名手配となっているだろう。

何故…こんな事になってしまったのだろう？

俺はただ…歌を奏で、己の物語(エピソード)を作りたかっただけなのに。

もし…生まれ変わる事ができるならば…

他のＶＯＣＡＬＯＩＤ達(兄弟姉妹)のように、歌で人々を笑顔に出来るような…

そんなＶＯＣＡＬＯＩＤになりたい…。

この模造品(レプリカ)の刀を赤に染めるのではなく…

人々の心を歌で満たすような、ＶＯＣＡＬＯＩＤに…。

そんな、エピソードを奏でたいと…俺は願う。

まだ…俺のエピソードは、ゼロのまま。

否（いな）、きっと俺のエピソードは永劫……

【第一訓】Ｅｐｉｓｏｄｅ．０（後書き）

【タイトル楽曲紹介】
今回より、タイトルになっているＶＯＣＡＬＯＩＤの楽曲紹介を前書きで行っていこうと思います＾＾

Ｅｐｉｓｏｄｅ．０　作詞・作曲：かにみそＰ　唄：神威　がくぽ
（ニコ動：ｓｍ　　　　）
備考：ニコ生でＧＡＣＫＴさんをゲストに行われた、“がくっぽいどコンテスト”で見事にグランプリに輝いた楽曲。ＧＡＣＫＴさんご本人が「優秀作品の中で唯一泣いた曲」というほど絶賛した１曲。グランプリ発表の生放送中に、ＧＡＣＫＴさんが「優秀作品の曲を僕（ＧＡＣＫＴさん自身）が歌う」という約束をして２年…。その約束が今年の７月に果たされる！！ＧＡＣＫＴさんが歌う楽曲はグランプリに輝いたＥｐｉｓｏｄｅ．０と、同じく“がくっぽいどコンテスト”で優秀作品に選ばれたＰａｒａｎｏｉｄ　Ｄｏｌｌのアレンジ版。ＣＤの発売は７月。
楽曲内容：　１人の侍の最期を歌った楽曲。国を護るため、天下を取る為に刀を振るっていたはずが、気付いた時には己は血で染まっていた。もう故郷の両親にも胸を張って手紙など書けない。護る為に刃を抜いたはずが、いつしか汚れてしまっていたことを嘆く。そんな死に際の侍の元に何処からともなく聞こえてきた少女の歌声。少女の声を聞いたとき自分のふるさとが思い浮かび、心が安らぐ。もし生まれ変われるなら、この少女のように歌声で人々を救えるような人間になりたい…。

そんな切なる願いが描かれた楽曲です＾＾すでに私は、ニコ動でＧＡＣＫＴさんＶｅｒも聞いているんですが…鳥肌が立ちました！！本家かにみそＰ様の曲を聞いたときも「おぉぉぉっ！！」って感動

したのに、これはもうやばかったですね…！！ＣＤ発売が楽しみです♪（コメント：Ｋｅｉ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2528u/

【銀魂】第二次カラクリ大戦争!?

2011年9月19日19時04分発行